

白井エコセンター

東京・足立区立栗原小学校

子どもたちにとって、ごみはもっとも身近な環境問題だ。産業廃棄物の収集・運搬・処理を行う白井エコセンター（東京・足立、堀口千明社長）は、足立区立栗原小学校で、ごみの分別を

テーマに環境授業を行った。講師陣は、今年度入社の佐藤伸幸さん、木村英恵

実体験から必要性を学ぶ

ごみの分別で地球をカッコよくする



分別回収の大切さに耳を傾ける

「ごみが校庭に出現すると、五年生三十二人はワクワクして持ちきれない様子だ。最初に児童全員に重手が配られ、三班に分かれて、それぞれに授業開始となった。ごみが校庭にいく、家庭や学校内で分別回収が進んでいるところあり、「これアルミ缶」「ニスチルだよ」と判断はかなり正確だ。講師がチェックした後、分別表を見ながら分別の大切さやリサイクルについて解説していく。作業員が着ている上着は「大きいベントポトル十三個でつめるごみがまる」と聞き、「ごみは確かに身近です

ごみは玉子まんぼうが苦手と作業員十人。山積みのごみに取り組み、秋晴れの空の下、街でよく目にする青いごみ収集車、ペットボトルを3分けて

ごみの「分別体験班」は、一人ずつごみ袋を収集車に積み込み、スイッチを押して袋を内部に送り込んでみる。「荷下ろし見学班」は、大きなごみ収集車の荷台上がり、ごみがスライ

サイクル効率のよさに一同びっくり。

が、運ばれていく先は子どもたちには見えません。だから「興味があわく、そこから「奥深い体験になりませう」とごみ分別を学習することでごみ分別の必要性を知ってもらえればと思います」と、白井エコセンターの百瀬友三香さん。担任の小俣昌彦教諭も「ふだん見られないものが見られ、奥深い体験になりました。石井和夫校長は「ぜひ家庭でじっくりこの続きを話し合ってください」



ごみ収集車の動きを間近で観察した